

平成27年度 校内研究のまとめ

H28. 2. 3
教務部（研修担当）

1. 1年次の研究のまとめ

（1）研究の主題

「ひびき合い、新たな学びを探究する子どもの育成」
～ユニバーサルデザインの視点を生かした授業を通して～

（2）研究の仮説

- ①子どもの思考が焦点化できるような工夫をすることにより、子どもは既習事項を生かして課題を解決しようとするのではないか。
- ②ICT等を活用し、児童が視覚的に捉えられる教材を提示することで、全員が授業に参加でき、わかる授業になるのではないか。
- ③対話等を取り入れた授業を展開し、児童の思考が共有化されることで、全員がわかる授業になると共に、話す機会の増加によって、話すことに慣れたり、よりよい話し方を学んだりすることができるのではないか。

（3）昨年度までの課題を受けて今年度取り組んだ事柄

習得した知識や技術を次の新たな学びにつなげ、探求する力を育てること（活用する力）、そして学んだことを適切に「話す」力を育てるために「焦点化」「視覚化」「共有化」を取り入れた授業づくりを行う。

（4）成果と課題のまとめ

<①子どもの思考が「焦点化」される課題提示について>

<課題>思考が焦点化できるような工夫をすることで、子どもは既習事項を生かして課題を解決しようとしていたか。

○単元を通して授業の進め方を定めたり、作業を繰り返し練習したりすることにより、子どもたちは既習事項を生かして課題解決ができるようになっていた。

○この時間・この単元で何を学ばせたいかを教師のねらいがしっかり焦点化していると、子どもは何を考えると良いのか理解しやすい。

○国語では、扱う文章を短くして焦点化しないと子どもの思考が活性化しない。しかし、読みとりをしっかりしないと機能しないため、宿題などで読み取らせたり読解力の向上の別の手立てをとったりすることが高学年では大切である。

○課題提示について、「何を提示するのか」、「どういう風に提示するのか」というような、こちら側の提示の仕方が重要であり、それによって良くも悪くもなることが実感できた。

<②教材の視覚化について>

<課題>視覚的に捉えられる教材提示をすることで、全員が授業に参加でき、わかる授業となっていたか。

○模造紙や大型モニターなどで、子どもたちが情報を一斉に見られたので、学力差があっても授業に全員が参加できていた。

○絵や図、写真を活用すると、言葉だけの説明より理解しやすい。

- 何をどのような場面で映すのか（見せるのか）を板書計画同様考えないと、情報過多になってしまうので、精選が必要である。
- ICT機器はトラブルも想定して、写真などの代替措置も準備しておくこと、そして教師自身がICT機器に慣れるよう学んでいかなければならない。
- 何でも見せればよいというものではなく、思考が拡散型なのか収束型なのかで見る枚数が決まる。残すものなのか消えてもいいのかも検討する必要がある。残さない方が思考の妨げにならないこともある。子どもに何をさせたいのかによる。ある程度パターン化されていると良い。教材作りの中で選ぶ必要がある。
- 写真を見せて視覚化するとわかりやすく、理解は高まると思われるが、本質的に理解しているかどうか見極めることが大切である。視覚化するだけで、教師が安心したり、視覚化が目的になったりしないようにすることが大切である。

<③児童の思考の共有化について>

<課題>対話などで児童の思考が共有化されることで全員がわかる授業となっていたか。また、話す機会を増やすことにより、抵抗感の払しょくや話す技術の高まりは見られたか。

○本校の児童の実態には、いきなり全体交流をするのではなく、ペア学習や少人数グループの話し合いを経てからのほうが学習内容の理解に有効である。

○日頃から話す機会を取り入れていることで、4月よりも話す技術は高まっている。

- ペア交流の目的が薄れてきた。形式的にやっていて、ただの「炉端会議」と化している。もっと効果的に使えるのではないか。どういうポイントを話し合うかを焦点化しなくてはいけない。全体交流も「ただの発表」ではもったいない。それぞれの考えの共通点を見付けるなどの目的意識をもたせるのが大切である。
- 相手に向かって伝える意識をもたせる必要がある。教科によって、より良いところを見付ける、類似性を探すなど、いろんな対話の仕方がある。教科によるので、研修する教科を絞った方が良い。様々な考えかが合って良かったという道徳と他教科では違う。

<その他、仮説にかかわること以外で>

<その他>仮説以外の部分で、お互いの授業を見合い学べたこと、参考になったこと、今後に生かしたいことなど。

- ユニバーサルデザインはとてもいいと思うが、日常化が大切である。普段の授業の時に取り組んでいくことが大切である。全校的に日常化していることが見えると良い。
- ・「ユニバーサルデザイン」を子どもたちにも意識させると、学ぶ喜びや楽しさを感じられる。最初から意識できる子どもは少ない。目的意識を高めるためにも、教師と子どもが共有できるような目標や目的があるといい。そうすると日常に生かせる。
- ・どの教科の、どの学習場面で、どんな学習スキルを身に付けさせるかを年間指導計画に位置付けることができたら良い。その学習スキルが自分たちに付いているか、月末に自己評価を取り入れるなどという方法も考えられる。

2. 仮説の検証

○3点の仮説を通して「自ら課題を見付け、意欲をもって学習を進められる子ども」像に近づけたか。また、3つのアプローチの仕方が正しかったかどうか。

・ユニバーサルデザインが目的ではなく、ユニバーサルデザインを手立てとして子どもたちが主体的になったかどうかをゴールとしたい。

●意欲をもたせるところが難しい

○●「意欲をもって」は4月当初よりは近づいた。目の色を変えてやるようになってきた。「自ら課題を見付け」というところは不十分。、「やりたいな」という学習意欲の持続が課題である。

●課題設定の改善が必要。

●速度環境のせいで調べ学習にパソコンが使えない。動画も見られない。

●視覚的な教材をたくさん使っているが、それを提示しない時の学習の仕方も身に付けていけないといけない。(音声言語での理解も必要)

●自分で課題を見付ける力が育つよう手立てが必要。

3. 次年度の共同研究の方向性

- ・本校児童に付けさせたい力 ～「自ら」課題を見付ける
- ・教科をしぼって研究を進めるべきかどうか
- ・アセスメントシートと個人カルテとの関連など